



あきらめないこと、そして「ゆかいにやる」精神も大切

生涯学習開発財団理事長 松田妙子

生涯学習開発財団は、今年で設立から34年を迎えます。これまで多彩な支援を通して企業や個人の学ぶ意欲を応援してきました。日本の社会も高齢化が進み、設立当初とはずいぶん違ってきていますが、皆様には生涯学習を理解していただき、大いに実践者となって欲しいと願っています。

私は今年10月の誕生日で90歳となります。今の自分が好きです。年だからといって、年齢を隠そうとも思いません。長く健康でやってこられ、幸せです。

先日、国会議員であった父、松田竹千代の古いポスターを見つけたのですが、そこには「ゆかいにやっていきましよう」と書かれていました。私は今まで、人のため、社会のためにと働いてきましたが、「ゆかいにやる」、その精神も



クロコディロス2016日本公演にて。

一つのものとして大切にしてきたことを思い出しました。

26歳のときロサンゼルスに住みたいと思ってロスに行き、テレビ局NBCで職を得ることができました。積極的に手紙を書き、NBCの親会社の会長に認めてもらったのです。アメリカでは、女だからとか、日本人だからといって、差別されたことはありません。そういうことを考えたこともないです。ナット・キング・コールを初めてテレビで取材したのは私です。コールも大変喜んでくれました。本当に毎日が楽しかったです。

日本に帰国後、2つの会社を興し、2つの財団の理事長をしてきました。65歳になったとき、自分にプレッシャーをかけるため、何か嫌いなことにチャレンジしようと思いました。それで何が嫌いなのか自分に問うてみたら、勉強だったのです。それから毎朝5時に起きて住宅の歴史を研究して、「日本近代住宅の社会史的研究」という論文を書き、71歳で工学博士号をいただきました。日本の伝統木造建築を棟梁から学び、実技と座学を身につける大工育成塾を開講したのは75歳のときでした。

人は年をとっているからとか、もう退職したからとか思っではダメです。年は気にしなくていい。私のこれからの目標は、伝統文化の復権と人材育成です。昼や湯たんぽ、七輪といった、昔の「暮らしの知恵」は素晴らしい。そういった知恵を、いかに今の生活に生かすか。自分で考えて勉強することです。あきらめるのはやめましょうね。

人に役立つために仕事をする作品に魂が宿ります



人形 (博多人形)

中村信喬

Nakamura Shinkyo

1957年 人形師・中村^{まんが}衍涯の長男として福岡に生まれる
 1979年 九州産業大学芸術学部美術学科彫刻卒業
 1997年 伝統工芸人形展にて文化庁長官賞受賞
 1999年 日本伝統工芸展にて高松宮記念賞受賞
 2005年 福岡県文化賞創造部門受賞
 2010年 第1回金沢世界工芸トリエンナーレ招待作家
 2011年 伝統文化ボーラ賞優秀賞受賞
 ラ・ルーチェ展にてローマ法皇謁見作品献上
 2012年 日本伝統工芸展無鑑査認定
 金沢21世紀美術館 工芸未来派 招待作家
 2013年 日本橋三越特設画廊個展
 2015年 「菊池寛実賞 工芸の現在」展 ノミネート
 現在 日本工芸会理事、九州産業大学芸術学部非常勤講師



永遠の航跡 (2015年)

博多人形は、粘土を焼成し彩色をする、古くから博多に伝わる伝統工芸の一つ。作る人の哲学や歴史観などによって表情も雰囲気も全く異なる。中村信喬^{しんきょう}さんの作った人形は、モデルの人物が生きた時代にタイムスリップしたかのように引き込まれる。自我を排し、人のために仕事をする心を心がけるといふ。人形だけでなく巨大なモニュメントなども手がけるが、その背景や思い、代々親から子へ伝えるものなど、中村さんと中村家の仕事に取り組み姿勢を、前後編の2回に渡って紹介する。

——まず、博多人形について教えてください。

博多人形は土物と言われ、粘土を素焼きして白い胡粉^{こふ}を塗った上に彩色した人形です。起源については3説あります。1601年、藩主の黒田長政が築城した際に、瓦職人の正木宗七が人形を献上したとする説。陶師^{すえし}の中ノ子家が起源とする説。博多祇園山笠の小堀流山笠人形をくむ白水家だとする説。実際にはそれらの職人の技術が集約されて、小さな細工人形から山笠の人形飾りまで作られる中で、現在の博多人形が発達してきたのです。

——中村さんも大きなものを作られていますよね。

はい。山笠の人形はもちろんですが、福岡市動物園に御影石の6トンのかいゴリラを作りましたし、福岡空港に約5m×3mのモニュメントを作る予定もあります。博多は遣唐使の時代からずっと交易拠点で、常に新しい技術が入って、高度な技術者集団が生まれました。原型師といって、長崎くんちの龍の船とか、有田の柿右衛門らの造形物の原型を、博多人形師が作っていたそうです。うちもその1軒で、材料は土に限らずなんでも使

います。木で彫れと言われれば木で、絵をかけと言われれば絵で、なんでもモノを生み出すのがうちなんですね。

——幼い頃からお父様の仕事ぶりを見て育ったとか。

祖父と父は人形師、母も人形師の娘で、生まれた時から人形師になるのが当たり前という雰囲気の中で育ちました。子供には父親の仕事ぶりを見せておくのが、代々続いてきた伝統なのです。仕事の様子が目に焼き付き、自然に人形制作に入っていきます。しかし、技術は教わりませんでした。見たものを、工夫して作り続けていけば、技術は自然に身につくものとの教えです。私の息子も、そういった環境の中で育ち、3歳の頃から私の仕事風景を見ていました。5代目になる予定の孫は現在2歳ですが、すでに仕事風景を見せています。本人に興味と才能があれば、思春期までにデッサンを徹底してやって、絶対的な立体感を身体に備えさせます。

——ご自身が子供の時、大変だなと感じたことは。

小さい時、父から「自分や祖父はなりたくてなかったわけではないがここまで来た。おまえはなりたくてなかったのだから、自分たちより上に行くのが当たり前だ。できないはずがない」とよく言われました。何度やっても上手くならないので辛い時期もありました。

でも父は死の直前、「お前の好きなようにやれ」と言っ
て、「右手を握れ、その手に渡してやる」と父の魂を私に宿してくれました。父も祖父から右手を握って受け継いだと聞いています。私もいま息子に言っています。「死ぬ時、目に見えない物を渡すから、それまでに器を作っておけ」と。人形は、他の工芸のように使う道具じゃないので、極端に言えば要らないものなんです。見るだけで幸せにさせる。だから純粹工芸とも言われる。技術があればきれいな人形ができますが、それだけでは人を惹きつけることはできません。技術だけでは、家族や職人を抱えて食ってはいけません。

福岡市動物園 座れるゴリラの彫刻 (2008年)



遥かな道 (2014年)



——技術よりも大切な、心構えのようなものですね。

息子は東京芸大の大学院まで行って先日大きな賞を取りましたが、そうすると、私もそうだったけど天狗になりがちです。だから草むしりや掃除の修業をして器を磨いてきなさいと。それをしないと人の気持ちが悪くなりません。人形は、たとえば「この子が健やかに育ちますように」といった、その人の祈りが込められています。自分は何のために仕事をしているのか、自分を捨てて人の役に立つということを叩き込まないといけないんです。自分を評価してほしくて作るのなら自分の部屋に飾っておけばいい。誰かのために作ったうえで、芸術性が高ければ工芸としても芸術としても通用すると。

——大学では学べない、中村家ならではの教えですね。人に役立つために仕事をすることを意識すると、作品はガラリと変わります。作品に魂が宿るのです。

弟子にも常に勉強しろと言っていますが、「興味がある。作りたい。だから知りたい」という思いがあれば、そのための勉強は苦労じゃないですね。「同じ眼と手があるのに、あの人にできて自分はなぜできないのか。できるようにになりたい」と思いますから。(次号に続く)



聞き手:上野由美子(左)

古代オリエントガラス研究家。UCL (ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン) 考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年~2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切り子装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

「多元的共生をめざす社会を支える

コミュニケーション

今回から「多元的共生社会における生涯学習を考える」と新たなシリーズになった第1回が、12月4日(日)、東京大学の福武ホールにて開催された。講師の武田信子氏は、世界でも有数の多元的共生社会とされるカナダのトロントにて、カナダ屈指のコミュニケーションワーカーたちとの交流や議論を通して、コミュニケーションの理論と実践を学んできた。多元的共生社会とは、多様な人種や文化、弱者を含むさまざまな社会的立場の人達が、価値観の違いを尊重しつつ納得を得て進む道を決めていく社会、あるいはそうせざるを得ない社会だ。

■ **グループ分けて、南北問題を体感**

武田氏が最初に行ったのは、口角を上げて笑顔を作る練習。留学中に「君は日本人なのに笑顔でハローが言えるんだね」と言われて驚いた。日本人は軽やかに挨拶できないと思われているのだ。多人数・多文化の社会において、笑顔で挨拶することは、自分にはあなたに敵意はありませんよというコミュニケーションに欠かせない合図なのに。通常の講演スタイルで参加者が座席についていたのはここまで、5分だけだった。その後は5人ずつのグループに別れての交流、議論、シミュレーションなどを各々

でテンポのよい講義となった。

5人組を作る際、男女混合・同じ都道府県出身者は2人までという縛りがあった。すぐにできたグループも、なかなかできず右往左往するグループもあった。東京開催のため必然だが、東京出身者がけっこう残った。「早々と組めた人はホッとしたでしょ。悪気はないけど、遅れてる人たちのことはあまり気にしませんでした。じつはこれが南北問題なんです」。実にわかりやすい体感だった。条件を緩めて、全グループが完成。1人1分でふるさと自慢をすることに。人の話を聞く姿勢を示すために、笑顔、頷き、話し合った後の拍手はいいですね、とフォロウも。

■ 宇宙から異形の怪人がやってくる

続いているワークは、「巨大なB星人が地球にやってきた。地球防衛軍であるあなた

5人グループで議論



次々と議論の設定を出す武田教授



2016年12月4日 東京大学 福武ホール

講師：武田信子 武蔵大学人文学部教授／臨床心理士

東京大学大学院教育学研究科博士課程修了／元トロント大学及びアムステルダム自由大学客員教授。専門は、臨床心理学、教師教育学、子ども支援専門職の人材育成。全国でワークショップ、講演など多数。FBグループページ「遊ぶ・学ぶ・育つ」「教師教育学研究会」「だっことおんぶを語る会」等で、子どもの育ちや教育に関する情報を広く提供している。

ければ地球侵略の意志はないとしたら。スーパーヒーローを呼んで3分間で退治してもらって済む話だろうか。容姿や言葉が違う人たちが隣にやってくる。日常の中で同じようなことはないだろうか。原発事故の福島から避難してきた人をどこまで受け入れられるのか？ホームレスの人が地域に増えたら？知らない他人のためにワークシェアリングはできるのか？ある調査では、外国人が近所に増えることに抵抗感があると答えた日本人は42%だそう。さてどうするとまた議論。

■ カナダの移民政策と福島の母親に学ぶ

カナダでは2016年に2万5千人のシリア難民を受け入れた。トルドー首相は前年秋、それを公約に掲げ当選し世界から注目された。カナダはもともと移民の国で、トルドーは「移民は労働力、人財、多様性をもたらす新たなカナダ人」と訴えた。国民の意見も、国を強くするために助けたいとする指示派と、安全とコストが見合わないと考える反対派に二分されたという。そうした両方の考え方や経緯が、現在カナダの小学校の社会科教材になっている。

この日は、福島県の母親たちが利用者からスタッフになっていく過程で使われた『実践コミュニケーション』（学文社）のレジュメを使って、コミュニケーションに必要な理論とスキルが紹介された他、最後に一般市民が多元的共生を目指していく「日本コミュニケーション七輪学会」の試みも紹介された。